

生と死と愛と 皮肉なる友に捧ぐ：ドラマ

著者	田邊，たけし
雑誌名	龍南
巻	2 1 0
ページ	5 6 - 6 6
発行年	1929-07-01
URL	http://hdl.handle.net/2298/6887

「生と死と愛と」

（一五）

生と死と愛と

——皮肉なる友に捧ぐ——

田邊たけし

「人」

男

女

若い人

少女

「所」

線路の土手右手勾配（四十五度）リアリズムを無視すること右手に電柱街頭、電線は天に連り他は地に向ふ左にベンチ一脚土手には階段あり背景は暗黒、街燈は光鈍く月の照明になるべく關らない様にす土手には通行道路を穿つてある空間は照明で以つて充される。

夜——月——沈黙——女は今來たらしい。

男、女二人腰を下してゐる

女 随分待つたの

男 街燈のともつてからずつと

女 すまなかつたわ

男 そう思ふだけまだ人間味があるんだね

女 有つても無くつても毎晩の事なので母が——それで私——きつとわかつてたのよ

男 お母さんつて有難いものだなあ

女 どうして

男 時間に遅れる時のいゝ口實になるんだもの

女 あらそれは本當よ

男 どつちが

女 私の云つたこと

男 僕のは

女 つまらないことばかり

男 生きてゐることだつてそうだと云ふんだらう

女 そうとは思はない？

男 思ふ人なんかは直ぐ此處で（線路を指す）目的は達せられる

女 でも誰か居なくては

男 死ぬのに連がゐる位なら生きてる方がまだ増しだ

女 貴方はそんなにこの世がよくつて？

男 悪くはないさ、死ぬ程辛いことがない限りは

女 ほゝ、男つて皆そんなものね、死ぬ程愛する……そんなこと男には一つも……さうだわね。たゞ一時の慰みに女と戯れると

「生と死と愛と」

云ふだけでせう、勿論男には死ぬ程辛いことがあり様筈はね……でも女はまるつきり反對よ、女が戀に殉ずるつてなことは珍しくないわ

男 そのくせ男に連を求めるんだからたまらない

女 死と云ふものがどんなに女の情熱の高唱であるか又どんなに美はしいものか男に教へてやるだけよ

男 男は段々それにひきいれられてゆくのかあはゝゝ

女 貴方は笑つてゐるの

男 笑つたかも知れない、生きることは面白いんだから

女 そのため笑つたんじやないでせう

男 さあその邊はどうか

女 わからないと云ふて笑はれる程私は馬鹿じやない積りよ

男 そう思つてたら間違ひないだらう

女 一体私は此處に何しにきたんだらう

男 男の顔を見たいために（以下夢に酔へる獨白）

女 いゝえ

男 男の唇を求めて

女 いゝえ

男 僕だつて街燈のともつた頃から此處に來て何してゐるんだらう

女 母まで欺いて

男 友人の用事もそのまゝにして

女 此處は心を引く何かがあるんだわ

男 夢を見る爲にか

女 死と戀が一緒にあるからだわ

男 戀かも知れないふんやつぱり俺はこの女を愛してるんかな

女 私は冷やかに微笑んでるこの男を死ぬ程愛してるのかしら

男 違ひない

女 確にさうらしい

男 君は僕の愛を入れてくれるかね美はしいこの月影の下で

女 貴方は私のものよ

男 僕は君のものか

女 そんな皮肉で私の愛を醒さないで下さい夢を見る間だけでも私は眞の戀を握りたいんだから

男 他の戀には眞實味が缺けても？

女 私によつてはいけません。私の戀人は一人しかゐないんだから、さゝ離れてもつとく私は貴方見たいな人は始めて會つたのよ。そんなにつきまとはないで下さい

男 僕等は何云つてるんだらう、戀だとすると少し變だ、あの女を逃れる位なら戀かも知れんぞ

女 貴方はまだ考へてるの……あの女を……

男 夫のある女をか、忘れたら君が幸福になるとでも云ふのかい、今死なうと考へてる君が

女 しつ、私の戀人が此方へやつて來たよ、そんなことを云ふものじゃない

男 その戀人が僕だとしたら

女 知らない！男つて神の様に一人の女を崇めながらも何處かで他の女と關係しなけりや氣がすまないんですから例へ人妻であらうと

男 「そりや實際僕的事だとても云ふと思つてゐるんかい、時にはね、考へて見たこともあるさ

女 つまらぬことよ、（間、月が雲に入る）

女 おや暗くなつて來た様だわ

男 月が雲の中に飛込んだんだらう

女 まあ私今まで何を考へてゐたのかしら

男 夢を見てゐたんだね

女 私が——私がそしてどんな事を云つたの

男 僕の様な男は嫌ひつて、もつと夢の中の戀人の様な立派な綺麗な自分の思ふ通りになる人じやなけりやいけないつて

女 私！私何時そんな事云つたんでせう、覺えがないわ、でも貴方も冷ささうにして何か云つてらしたわ

男 どんなこと？

女 私が嫌ひつて

男 あはゝゝ

女 オホ、ゝ、ゝ（同時に笑ふ）（汽笛がなる）

女 汽笛がなるわ

男 貴女とのお別れももう直ぐですわ

女 何か云ふことはない？

男 そりやこつちから云ふことだ

女 死ぬものは現實に失望してるのよ、汚い現實から——夢の世界に——、夢を啖ひに行く人がどうして云ひ遣すことが……

男 無かつたら黙つて死んだらいい

女 貴方の語はそれだけの、少くとも愛する女に對する語は

男 それならどう云つたらいいんだい

女 知りません、何も私にそんな事相談したつて、勿論自分にしなけりや

男 するにはするがね、僕には少しも感興が……ねえわかつてるだらう

女 接吻なりとやらなきあでせう

男 どうだ生と死の別れに一切を忘れて

女 ほゝゝ一切を忘れてつて經驗の爲にやつてる貴方の接吻よりも鐵の首棚の方が餘程増しだわ

男 何も無理に進んでやしないんだから

女 どうせ男つてそんなものよ

男 「男は盲で女は偽善者」ルノルマンが云つてた。だが實際女は死ぬ瞬間まで妙な氣どりを示すものだ。その着物の様に

女 そのくせ男は云ひよられると斷り切れないのね、それが如何に氣に添はなくなつても

男 だから盲だつて云つてゐるんだ

女 盲でも生きることがそんなに幸福なのかしら

男 偽善の假面を被つて死ぬ女よりはね

女 お互に立場が違つてゐるんですもの

男 だから君と僕とは何處まで行つたつて交り點は見出せないんだ

女 その時女は焦燥の中に死を肯定してふと云ふ段取りね

男 男は又別に何かの抱負を抱いて塵箱をかき廻すんだ（汽笛近くに鳴る）

女 おや汽車が近づいて来たわ

男 愚圖々々しちやいけないいまあ身体を綺麗に整へて最後まで偽善の假面をぬがないさ

（若い人と少女手をつないで急いで出る）

若い人 まだ来ない様だ、もし（男に呼びかける）汽車はまだでせう

男 直ぐに××驛を發するでせう

少女 貴方接吻してよ（若い人接吻す）さあもつと強く

若い人（男女に向つて）貴方達も御同様ですか

女 死ぬことは私には喜びなのです

若い人 二組の連だとなると随分賑かですね

少女（男に）貴方もやつぱり行くの

男 僕はこの人達の掃除人です。この人達が夢を啖ひに出かけてからゆつくり後掃除をしてやつてくる積りです

若い人（男に）面白い人だね君だけ別かい

男 全く妙な仕事を仰せつかつてやりきれないんだ

若い人 まあ理由は何としたつて生きてる方がいいですね

男 君は生きる積りか

若い人 否違ふ

男 矛盾しきつた説法は許してもらひたいね、生も死も肯定して丁ふなんて云ふことは人間が一身で負ひ切れないことだから
女（若い人に）この人の目には私等の美はしい仕事を取るに足らないつまらぬものに見へるのです。

少女 私だつて同じことよ

若い人 えつ！

男女

若い人 お前は僕を信じてくれないのか

少女 経験を求めて歩くのはよして下さい、死だつて夢見るための経験なんでせう

男 然りく

少女 私は試験用の器具じゃなくつてよ、接吻だつて何も愛の爲の道具では——たゞね私の官能をいやが上にも——そんなとこ

ろよ

若い人 浮賣奴！
ヒヤウ

男 お互の内証は止めにしてもう直ぐ汽車は来る筈ですから

女 私の可愛い掃除夫さんどうしたの

若い人（少女に）ねえ僕を信じてくれ、何時も見たあの夢を探しに來てくれお前は僕の花なんだから

男 それ：汽車の音が聞へる用意はいゝか

（沈黙（お互の心の中に様々の考が浮ぶ）

（その間を充すに充分な列車の音聞ゆ）

女 死！死！私は母に嘘をついて此處に來て了つた死ぬ爲に來たのだらうか、いえ家を出るまではあの人と會ふ事の他何も考へてゐなかつた、でもあの人の冷淡さを見た時に死を決心したのだ

男 さあ用意はいゝか

若い人 ねえ現實の憂鬱を煙にしてもお前は望まないのかい、二人で……………さあ私の震へる小羊接吻するんだ（少女に唇を寄

す)

少女……(若い人の唇に接吻して)やつぱり死ぬの

若い人 夢を忘れてはいけない人間は一度大きく笑ひながら猿の様に夢を啖はねばならない、ねえいゝ子ださあこの上に登らう
少女 (若い人に吸つけられる様についてゆく)

男 さあ汽車が来る皆この世から消へて了つた

女 貴方やつぱり死ねないの

男 彼奴等の云つてゐる様なだめすかしはよしてくれ

(男を除いて皆が線路に登る)

男 あはゝゝ皆行つて了つた

若い人の聲 さあ死ぬんだ平和と喜びの國へ向つて

女の聲 死ー母ー男ー私の心臓は破烈しさうだ

少女の聲 死なねばいけないの？生を肯定してゐながらも

男 おーいもう直ぐ汽車が来るぞ (汽笛)

一切がお前達の頭からぬけ切つて了ふのだ

(この時轟然たる音とともに汽車通り過ぐ)

(男ベンチにうつぶす) — 間 —

男 (顔を起しながら)あはゝゝ(空虚な笑)恐ろしい妖魔は一切を拂ひ捨てゝ人間の作る總ゆる覺悟と欲望を現實に残して生命を満載しながら去つて了つたのだ、何處に俺達人間の偉大さがあるんだらう、何を求めて俺は人は生きて居るんだらう死の喜びそれはあらゆるものの忘却の中に沈むことなのだ、あはゝゝ(空虚な笑)俺は死ねないのか(眼は常に一方のみを見つめ

て歩く)

(少女表れる)

少女 (線路の上から) 貴方死の妖魔は私を振切つて逃げて了つた

男 違ふく、貴女の感覺的な肉体はまだ生に引かれてゐたのだ

少女 感覺は生の喜びだもの

男 それが本當の人間ではない

少女 人間は生きてることによつて始めて人間である、死は鳥獸と少しもかはらない

男 かはらない? 生から死への直線を直ぐ書ける者が本當の人間です、生きることは人間ではない

少女 貴方の語は私には分らない

男 わかるはずはないさつきの妖魔が僕の考へを無茶苦茶に叩き壊し了つたのだから

少女 では貴方は私を夢の抱擁に酔はせることなんか忘れて了つて?

男 僕は知らない、僕は何も知らないのだ

少女 (線路から飛降りて) あゝ私はどうして死ななかつたのだらう、貴方の目は私の死を馬鹿のことだとして見て居るし、そ

の可愛い口は死なうと云ふ不心得をなして生の喜びを説いてゐる様に見へたのです

男 僕の目、僕の口——これは皆生の道具です虚偽です死は眞實です

少女 いゝえ死は夢です

男 でも僕の目や口は若い人のそれとは違つてはゐない

少女 いゝえあの人の目は死を夢見てもどろみでした、口は誰かの連を求めんとする弱い人間性の叫びを上げてゐました

男 而し今の僕の耳はあの人達の聲を聞いてゐるのです

「生と死と愛と」

少女 私の聲は少しも聞へないで？

男 どんな夢の囁きも聞へた耳も地獄の音しか聞へなくなりました

少女 あゝ私！どうしたらいいのでせう

男 死だ！死だ！俺はあの女に戀してるのではない、又地上の女に戀してるのではない、たゞ死の永遠さを尊ぶだけなのだ（汽笛）
死が大きな呻を洩らしてゐる、この鎖！俺はする／＼と引ずられて死の中に飛込んだ了ふのだ（少女倒れて泣く）さあもう一度立つて美はしい夢を啖ひに旅立つんだ（汽笛）（男急に線路の上に上る）凡ゆる人間よお前達はない人間たることはどんな時にでも死を肯定し得ることだ、死！死！

少女（土手により添つて）生から死へのこの段階を私はどうすればいいのですか

男 男の手に支へられて死ぬんだ（汽笛）おゝ聞へる／＼（少女線路の上に上る）ねえ死は僕等を呑んで了ふんだ（大聲で）さあ用意はいいか（男と少女抱擁す——汽笛）